

# 無変換日本語入力法(試作版) の性能評価

5L-2

下 桶 敬 則

日 本 原 子 力 研 究 所

本発表は、当学会第42回および第43回全国大会において、報告してきた一連の研究の第三報であり、試作版について、最終結果がでたので報告するものである。

## 1・無変換日本語入力法の原理

漢字をその部首と、読みの先頭一字の計2タッチで直接入力することを原理として、日本語文章を読み下した通りに入力しながら、変換キイなど押下することなく、先頭から仮名漢字混じり文を確定していくことができる。試作版では198種ある部首を、現行JISキ〜ボ〜ドをそのまま活用して入力するため『連続タッチ方式』を考案している。

## 2・プログラム、アルゴリズムと資源量

部首と読み先頭のみで約30パーセントの漢字が一意に確定する。さらに漢字の連続にあって、先の漢字が与えられれば続く漢字に制限が生じ、部首と読み先頭でこれを確定できる。これによって試作版にあって約50パーセントの漢字がさらに確定する。また、漢字列の冒頭字が複数候補あり、入力者が外部から選択せざるを得ない場合にあって、次にくる漢字部首と読み、または送りがなを入力すると、冒頭字が自動的に確定することがある。これによって更に無選択で一意に確定できる漢字の数を改善できた。

プログラム本体は約31KB(簡単なエディタ〜機能つき)

辞書58KB(単字)、510KB(熟語)

## 3・漢字確定率

無選択・一意に漢字が確定する率は、新聞記事(報道、評論など)、一般雑誌記事(エッセイその他)、科学記事などを対象としたとき悪くても90パーセント以上、かなりのケースで95パーセントの成績を得た。これは全文字数を分母にすると98パーセント以上の確定率となる。

残りの漢字については少数候補からの選択となる。例をあげると、読む/詠む、の如く部首と読みが同一で、かつ送りがなも同じといったグル〜ブである。また、美術書、短詩型文芸などにでく文を対象にした場合、現試作版では漢字確定率が先の数字より落ちる。これは用いている辞書内容がこうした分野に未整備であることを原因としている。

なお入力中、外部より選択した漢字は、即時に漢字候補冒頭に移し、かつデホルトで次回にはこれ一字のみを表示し、修正がなければ確定とするル〜チンも提供している。

## 4・逆ブラインド・タッチ

本方式ではキ〜ボ〜ドを一切見ない、いわゆるブラインド・タッチは不可能である。だとすると入力速度で不利になると思われるが、さにあらず、逆にキ〜ボ〜ドのみを見て入力し、CRTを見ない『逆ブラインド・タッチ』を推奨したい。

キ〜ボ〜ド・トップにある部首などから、入力している漢字のイメージを想起することができ、さらにその通りに確定していけるので、一々CRTの上で確認していく必要がないからである。この逆ブラインド・タッチ方式を支援するため、入力中、選択を要する所

